

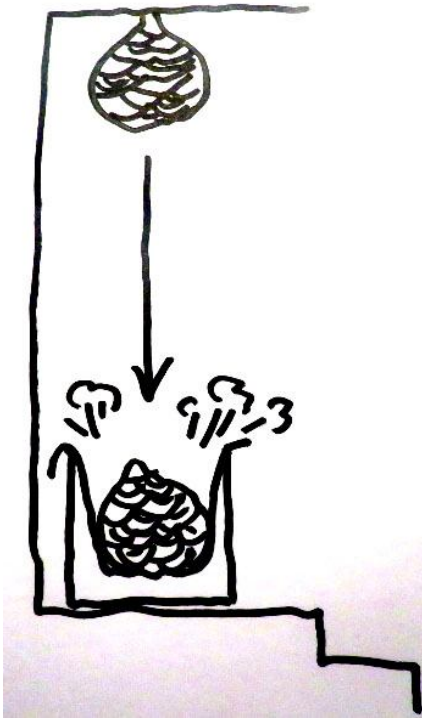
「スズメバチとの対決 (7)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「泡ジェット」の散布後、しばらく慎重に観察し、巣や巣の周囲の成虫の飛翔が、完全になくなったのを確認後、金属製の熊手(猪八戒の持っている道具のようなもの)で、巣を落とした。巣の直下は勝手口のタ

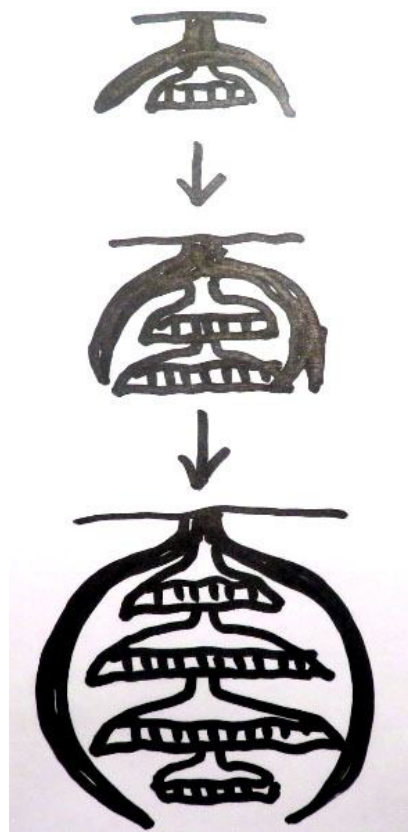


タキ(コンクリートの段)なので、そのまま落とすと巣がコップミジンになる。万が一生きていた成虫が残っていたら、飛び出す恐れがある。そこで、段ボールの箱に、透明なポリ袋を「トランポリン」のように張って、そこに巣全体が「軟着陸」するように、あらかじめ

仕掛けを作っておいた。



この方法は成功で、巣は見事にポリ袋内に落ちた。さすがに「外壁」は崩れて、原形は留めていなかったが、コップミジンになることはなく、内部の構造は「無事」だった。幸い、生き残った成虫はいなかった。



スズメバチの巣は、一番初めは、冬越しから目覚めた女王バチが、しばらく栄養補給をしたあと、一番上の段から造り出す。最初は何もかも女王バチ1匹だけの作業だ。最初は「壺状」の形状にはなっておらず、小さな「ハチの巣」が「笠」をかぶったような形状をしている。この時点では多くの方はスズメバチの巣だとは

気づかないようだ。

その後、女王バチが産卵して育てた子バチが羽化して「働きバチ」になると、2段目、3段目と下に向かって、細い柱でぶら下げるように「増築」する。外壁も次第に完成し、やがて壺のような形状になるのだ。更に大きくなる場合は、外壁の外に「第二の外壁」を造って、もとの外壁を削りながら肥大化するのだ。



今回駆除した巣は、「三段構造」だった。クリーム色に見えるのが幼虫、白い膜が張られているのがさなぎだ。一番小さい1段目の巣は、もう幼虫もさなぎもいなくなっている。驚いたことに、大量の薬剤を投入し、成虫は全滅したのに、幼虫はほぼ全部生きていた。どの幼虫も餌をねだって、口を動かしていた。